

二都物語

世界文學



E OF TWO CITIES
HARD TIMES
Charles Dickens

著 ズン ケ ッ イ デ

語 物 都 二

譯 泉 田 柳



版 出 社 潮 新

非賣品

世界文學全集(19)

二都物語

第二十回配本

昭和三年十月十日印刷
昭和三年十月二十日發行

翻譯者 柳田 泉

發行者 佐藤 義亮

東京市牛込區矢來町

發行所 新潮社

電話牛込

八八八八八
〇〇〇〇〇
九八七六五
番番番番番

振替東京 二三、四五〇番

序

『世界文學全集』の第十八卷として、チャールズ・ディッケンズの作品に譯筆をとるに當り、特に『二都物語』と『世の中（ハド・タイムズ）』を選んだのは、いろいろな理由がある。『二都物語』の方は、ディッケンズの小説中日本に最も早く名の聞えたものであり、恐らく最も早くまた廣く讀まれたものであらうと思ふのに、まだ譯出されてゐないこと、そしてこの作はディッケンズの作品中でも『ピックウィック・ペーパーズ』について世界的にポピュラなものであり、後者のユーモアの通じない人にもわかる上に、その通ずる人々にも佳作だと認められてゐるといふ長所があること、また『世の中』の方は現下の世相と對照して社會的興味と示唆を與へる點が少なくないこと、——それからディッケンズの作品として兩者ともにプロット中心に出來て居り、英文學の理解とか趣味とかいふむづかしい問題を別として、單に讀物としても十分の興味をもつて讀まれ得るといふこと、以上が私をしてこの二つの作品を選ばせた理由の主なものである。

また、すでに讀物といふ點を眼中に置いたので（この種の翻譯では當然のことであるが）、譯文も出來得る限り原意を汲んで和らげたつもりである。勿論原文への忠實といふことも許される範圍でつとめて、相當の成績を收めたと信じてはゐるが。

以上をもつて序に代へる。

一九二八年十月

譯者 識

解説

一、『二都物語』に就いて

『二都物語』は、一八五九年の六月から十二月まで『オール・ザ・イヤー・ラウンド』誌に掲載され、同時に分冊で月刊されたもので、ディッケンズのやゝ晩期に近い作である。

この作に表現された想——浪費された一生を最後の英雄的犠牲行爲によつて償ふといふ——の芽生めはえは、友人達や息子達を相手の素人芝居でウィルキイ・コリンズの『氷れる海』を演じてゐた時にふと思ひついたもので、それは一八五七年の夏のことであつた。五年の一月には、彼はこの想をやゝ具體的なものにして、いよゝ一つの物語に纏め上げてみようと思つた。一つは、このころ彼の家庭生活に破綻が出来て、夫人と別居の問題があつたので一心に仕事をし、ていくらか心の悩みを紛らさうといふ心算しんさんもあつた。この着想をいよゝ佛蘭西大革命を背景にした歴史小説に纏め上げるには、カーライルの著書から得た感興が大分彼を助けた。題目には、『生埋にされて』『黄金の絲』など、いろいろと考へつかれたが、一八五九年の三月に、『二都物語』としまつた。

この作に手を着けるに當りディッケンズの第一に立てた目算は、各章毎にやまがあつて、自然に、忠實な人物の活動する畫趣に富む物語にしたい、しかも對話の中で、人物が自分自身だけを語るやうなことにせず、あくまで物語によつて、語らせなければならぬ、——「出来事本位の物語にして人物を皆出来事の乳針にばちですり碎いて人物自身としての興味をなくしてしまふやうにしたい、」といふことであつた。この試みが、何處まで成功したか、こゝが批評家の異論のある點で、フォースタアの如き同情ある研究家でさへ、ユーモアがなくなり、「記憶に残る」人物が出て來ない

のでは先づ失敗だと斷言してゐるが、ディッケンズの傑作中第一と激賞する人も少くない。公平に言つてアンドルウ・ラングの言葉が首肯すべきものであらう。ラングは、この作のやうな貴族の壓制や人民の無秩序などを描いた場面の多いものではユーモラスでない方がむしろ結構である、また人物としてもドクタ・マネット、シドニー・カートン、マダム・ド・ファルジュのやうなあくまで記憶に残る人物を描いてゐる、十分成功と認むべきだといふのである。中心人物たるカートンについても、自然といひ不自然といひ種々議論があるが、彼の行動には全く不可思議と思はれるものは一つもなく、どこまでもありさうに思はれない點も一つもない。彼は自分で廢滅させた生命に些の値打ちを置いてゐないが、しかも思ひきつてそれを改造する氣力がない。彼には大きな情熱がある、「人は友のために生命を棄てることより大きな愛はもち得ない。」彼はルウシー・ダーネイに對する愛情の力に驅られて、彼にふさはしく、その浪費された生命を雄々しく氣高く終らした、ディッケンズの小説の讀者は、どの小説の人物に對してよりもシドニー・カートンに對してより、多く涙をそそぐことであらう。彼の最後の場面はいかにも多感多恨の趣きはあるが、しかもメロドラマには墮してゐない。カートンがディッケンズがかつて試みたどの典型よりも高大な面影をもつてゐるといふことは、今日ではもはや定論と言つてよい。

歴史小説といひながら、出て来る人物がいづれも非歴史的な人物である。「少數の人々の家庭生活が直に恐ろしい大きな公けの出来事と結びつき續り合はされて、その出来事の一部分となつてしまつてゐる。」ディッケンズは、實際に歴史を長々と述べたてない、それは物語の自由な發展を妨げるからである。こゝらは確かに卓見である。彼だとして、眞實の歴史的人物——國王、ダントン、マラー、ロベスピエールなどを採入れようと思へば出来たのである、また實際、スコットやデュマならさうして可成りな成功を収めることも出来た。だがその手法は危険に伴ふ、規模はあまり擴げない方が安全である、且つこの作がよい實例だが、それを擴げないからとて興味を殺ぐものではない。

もと／＼佛蘭西革命は借物で、いはゞ物語の爲めに存在してゐるにすぎない。史實の取捨はプロットが行ふ。あの華々しいバスチユ奪取の一節としても、プロットに必要なので描いたのである、即ち北の塔百〇五番にかくされたドクタア・マネットの手記をドファルジュに發見させることがどうしても必要だつたのである。この小説をよく讀むと、バスチユの攻撃が主としてこの目的からであり、大革命は主としてマダム・ドファルジュの「私怨」を晴らすために惹き起されたやうな暗示を與へるであらう。尤もそれを露はに出すまいがために、ディッケンズの所謂「カーライル氏の驚異すべき著書の哲學」によつて、革命の起るべき経路が物語られてゐる。バスチユと同じやうに、有名な九月虐殺も、單に描寫のために挿入されはせずに、物語の進展に肝心なだけゆるされてゐる。カートンが英國で會つた諜者と、巴里で危機一髪の際傀儡に使ふ諜者とが同一人物であることなどを咎め立てするのは、むしろ一種のアラさがしに類する。ディッケンズがコメデイ・フランセイズのレニエに手紙を送つて、この作は、「今まで自分の書いたうちで一番上出來の物語だ。」と自讃したのは首肯される。

全巻を通じて、各場面が（倫敦たると巴里たるとに係らず）幻視の高いレベルに達して、異常な描寫の力と劇的效果をみせてゐることは一讀した人のすぐ氣がつくところであらう。事實英國だけでも二度劇に上されてゐる。

二、『世の中』に就いて

この作は原名 ^{Hard Times} で、往々不景氣時代と譯されてゐるが、こゝではむしろ辛い浮世、世智からい世の中の意と解した方がよい。それで意譯して『世の中』と題した。これは、一八五四年の四月から八月まで『ハウス・ホルド・ウアーズ』誌に連載され、カーライルにディケートされたものである。先づ英國評論壇の二大家の言を聞かう。

ジョン・ラスキンは言ふ、『「ハード・タイムズ」は種々の點で、ディッケンズがかつて書いた最大の作物である（中略）。

苟も社會問題に興味をもつてゐる人々は、綿密眞摯な注意を以てこの作を特別に研究しなければならない」と。ジ・ケイ・チュスタンは言ふ、『「ハード・タイムズ」はディッケンズの最大の小説の一つではないが、最大の記念碑の一つである。何故ならこの小説は當時、非哲學的な不平の^{叫び}と考へられてゐた澤山のもの、だが後になるにつれて社會哲學といふ廣汎な現象と化した澤山のものに對するディッケンズの感情の眞實なことを記すものだからである」と。

以上の評言で、この小説の重きをなすのが藝術的技巧の點ではなくて、内容の社會的意義だといふこと、またいろいろの問題が暗示のまゝでまるで魔夢のやうに雜然とつめこまれてゐるといふことがわかる。ディッケンズがこの小説を書いたのは、自分の雑誌を賣り弘めたい爲めでもあつたが、同時に當時の英國の政治界の昏迷を多少とも覺醒させてやらうといふ意志が大いにあつた。だが彼の筆の及ぶ所は^さ當に政治だけに止まらない。一八五四年頃の英國人はまだ機械組織を尊いものに考へ、經濟學萬能の觀念がぬけなかつたのでディッケンズは之に一撃を與へようとした。

彼はまたこの小説の中の人物や事件をかりて、理性一點張りの連中に情味の必要なこと、事實だけを詰め込む教育は教育にはならないこと、打算ばかりを仕事にしてゐる連中に超打算の人間が必要なこと、資本と勞働の間には共に奉仕の道徳がなくてはならないこと、更に眞の意味で自由な平等や友愛的な政治が行はれない限り萬事が「滅茶々々」になるといふことを教へようとしたのであつた。一言でいふと我等の社會制度、社會生活の中に、更に高い正義、更に深い、更に眞實な自由の精神を入れたいといふのである。

『マコーレイは、『ハード・タイムズ』は一二節並々ならぬペyssにみちた所があるが、その他は不機嫌な社會主義である』と云つた。然しディッケンズは社會主義者ではない、眞の意味での自由主義者なのである。成るほど『世の中』にはペyssもユーモアも少ない、だがディッケンズの眞骨頂なる正義の怒りを冷然と投げ出したものとして是非一讀すべきものである。(柳田 泉)

チャールズ・ディッケンズ年表

一八二二年 二月七日、英國ボーツマス港に近いランドポートに生る。父の名はジョンで、ボーツマス船渠の海軍主計局書記であつた。母の名はエリザベス(本姓バローウ)。幼にして虚弱多病、屢々激烈なる痙攣に苦しんだ。母より國語、拉丁語の初歩を學ぶ。

一八一七年 父の轉任のため一家チェタムに移轉、追々家計不如意となる。讀書を好み『ロビンソン』、『トム・ジョーンズ』、『ドン・キホーテ』、『アラビヤン・ナイト』等はその愛讀書たり。十歳ならずして早くも一篇の物語を草す。即席にお伽噺を語るに妙を得、且つ天性の美音にて諸をうたふに巧みであつた。親戚に伴はれて觀劇に赴きてより演劇に非常なる興味をもつ。チェタムのジャイルズ・アカデミイにて數ヶ月間學校教育を受く。

一八二一年 ロンドンに移る。この頃家計の逼迫益々甚し。出で、黒色塗料會社の少年工となり人生の辛苦を具さに嘗む(二年間)。父負債のために監獄に投じられ、一時は一家獄内にて生活するの悲惨事となる。

一八二四年 家道やゝ復し、ジョーンズ氏の學校に通ふ。

一八二六年 學校を去り、諸所の法律家の事務所にて見習

書記となる。餘暇にはブリチッシュ・ミュージアムにて讀書し、又獨力、速記術を學んで大に上達す。

一八二八年 三六年にわたりロンドンの諸新聞の探訪記者(主として議會附き)として活動す。一面また不屈不撓の小説家修業時代であつた。

一八三三年 十二月、『マンズリ・マガジン』に紙上處女作を發表す。

一八三六年 『ボズ小品集』を刊行、『マンズリ・マガジン』その他に掲載せしもの。此年三月の末『ビックウィック・ペーパーズ』の第一回(彼の小説は多くは初め月刊分冊の形式をとる)發表されるや、忽ち嵐の如き人氣をち得、一躍文壇の大家となつた。爾後彼の生活は順調に進んで行つた。

一八三七年 『オリヴァ・トウィスト』を『ベントリリス・ミセラニイ』に掲ぐ、後分冊月刊。

一八三八年 『ニコラス・ニッケルビー』を分冊月刊す。

一八四〇年 『ハムフリ君の時計』『骨董店』『バーナビー・ラッチ(歴史小説)』を分冊週刊及び月刊す。

一八四一年 病あり外科手術を受く。

一八四二年 一月、第一回亞米利加訪問、非常なる歡迎を受く。『亞米利加雜誌』を出す。

一八四三年 『マーティン・チャップズルウィット』を分冊月刊。

『クリマス・カロール』を出す。

一八四四年 伊太利に遊ぶ。ジェノアにて『ザ・チャイムズ』を草す。

一八四五年 『ザ・クリケット・オン・ザ・ハース』を出す。

一八四六年 一月、『デーリ・ニューズ』の主筆となつたが、數週にして辭す。瑞西に遊び、同地にて『ドン・ペイ父に』を草し分冊月刊す。更に佛蘭西に遊ぶ。『生の戦ひ』發表。

一八四七年 友人を集め、素人芝居を試む。

一八四八年 彼の小説の露西亞譯出版の報あり。『幽霊につかれし男』出づ。

一八四九年 半自叙傳的長篇『ディヴィッド・カッパフィールド』(分冊月刊、五〇年完)出づ。この作の完結するや、サッカレー、テニソン等祝賀の宴を張つて彼を慰勞す。

一八五〇年 三月『ハウス・ホールド・ウァーズ』誌創刊。

一八五二年 『ブライク・ハウス』を分冊月刊す。

一八五四年 『ハード・タイムズ』(『世の中』)を『ハウス・ホールド・ウァーズ』誌に掲載。佛蘭西に遊ぶ。

一八五六年 『リットル・ドリーリット』を分冊月刊す。ガッツヒル・ブレース(邸宅)を購ふ、一八六〇年以後こゝを永住の所と定む。佛蘭西に遊び、文壇諸名士に歡迎さる。彼の小説の佛蘭西譯出版の契約成立す。

一八五八年 家庭生活の破綻にあひ、夫人と別居す、兩者

性格の相違より來りし不和の結果だといふ。翌年にかけて第一回自作朗讀講演會を各地に開く。物質的には大に成功せしも心身を勞せしこと少なからず。

一八五九年 夫人との別居の聲明より紛議生じ『ハウス・ホールド・ウァーズ』を廢刊し、新に『オール・ザ・イー・ア・ラウンド』を創刊し、『二都物語』を同誌に掲ぐ。

一八六〇年 『大なる期待』を『オール・ザ・イー・ア・ラウンド』に掲ぐ。

一八六一年——六三年 第二回の自作朗讀講演旅行。

一八六四年 『われ等は友達』を分冊月刊す。

一八六六年 六七年にかけて第三回の自作朗讀講演旅行。毎回盛況を極む。

一八六七年 この年の暮、第二回亞米利加訪問、到る處に自作朗讀會を開き、全國を熱狂せしむ。收益二萬ポンドといふ。されど健康は次第によくなかつた。

一八六八年——七〇年 第四回自作朗讀講演旅行。

一八七〇年 『エドウィン・ドルドの祕密』を分冊月刊。この年六月九日、腦溢血にてガッツヒルの邸に逝く。年五十九。計報到るや、英國は勿論世界中英語を解する人々の住む所、舉つて哀悼の意を表す。女皇ヴィクトリア陛下弔電を賜ふ。同月十四日、遺骸をウェストミンスター・アベイに葬る。

目次

二 都物語

第一編 復活

一 時代	一
二 郵便馬車	三
三 夜の物影	九
四 準備	三
五 酒店	六
六 靴造り	七

第二編 黄金の絲

一 五年の後	四
二 觀物	五
三 尖望	六
四 祝ひ	七
五 射	八

六 何百の人々	八
七 都會に於けるモンセニユール	一〇三
八 田舎に於けるモンセニユール	一一
九 ゴーゴンの首	二六
十 二つの約束	三七
十一 二幅對の一面	一三六
十二 粹紳士	一四〇
十三 不粹漢	一四七
十四 正直な商賣人	一五五
十五 編物	一五三
十六 編物のつゞき	一七四
十七 一夜	一八五
十八 九日間	一九〇
十九 意見	一九七
二十 願ひ	二〇四
廿一 反響する足音	二〇八
廿二 海はなほ荒れ狂ふ	二一九
廿三 火の手は揚る	二三五
廿四 磁石岩に引かれて	二三二

第三編 嵐の跡……………二四

一	獨房拘禁……………	二四
二	刃を研いで……………	二五
三	暗影……………	二六
四	嵐のうちの静寂……………	二六
五	木挽……………	二七
六	勝利……………	二八
七	扉を打つ音……………	二八
八	骨牌の勝負……………	二九
九	勝負開始……………	三〇
十	暗影の正體……………	三六
十一	薄暮……………	三〇
十二	夜……………	三五
十三	五十二人……………	三四
十四	編物の終り……………	三五
十五	歩みの音は永久に消え去る……………	三六

世の中

第一編 種播き……………三七五

一	必要な唯一のもの……………	三七五
二	幼兒の虐殺……………	三七六
三	隙見……………	三八二
四	バウンダアビー……………	三八七
五	基調……………	三九四
六	スリアリの曲馬哲學……………	四〇〇
七	スバージット夫人……………	四一五
八	不思議は禁物……………	四二三
九	シッシイの進歩……………	四二八
十	スティヴン・ブラックプール……………	四三六
十一	出口はなし……………	四四二
十二	老女……………	四四九
十三	レイチェル……………	四五四
十四	時——偉大な製作者……………	四六三
十五	父と娘……………	四六七

十六 夫と妻……………四七四

第二編 刈入れ……………四八〇

一 銀行小景……………四八〇

二 ジェームズ・ハートハウス……………四九三

三 不良兒……………五〇二

四 仲間同志……………五〇八

五 雇人と雇主……………五一五

六 零落……………五二三

七 火藥……………五三六

八 爆發……………五五〇

九 最後の言葉……………五六四

十 スパージット夫人の階段……………五七三

十一 下へ、下へ……………五七七

十二 轉落……………五八六

第三編 收穫……………五九二

一 必要な今一つのもの……………五九二

二 飛んだ笑ひ草……………五九八

三 斷然たる決心……………六〇八

四 失蹤……………六一七

五 發覺……………六二七

六 星光……………六三七

七 不良兒追跡……………六四七

八 談理的一幕……………六五九

九 結章……………六六五

二都物語

チャールズ・ディッケンズ著
柳田泉譯

第一編 復活

一、時代

それは、今までの時世の中でも、最も傑出した時であると共に、また最も悪い時でもあつた。叡智に充ちてゐるやうで、また愚昧な世でもあつた。信仰の時代であると共に、また不信仰の漲つてゐる時代であつた。光明に輝いた時とも思へるが、また暗黒な時代とも言へる。希望に溢れた春であると共に、絶望に鎖された冬であつた。人々の前にはあらゆるものが備はつてゐるやうだが、反對に何もないやうでもある。人々は皆、天國へ昇りかけてゐるやうだつたが、同時にその反對の道へ向つて墮ちてゐるのかも知れない。——一口で言へば、この時代は、口やかましい當時の權威者達が、その善惡兩面ともに最大級の言葉を使つて論ずべきだと主張した點から考へてみると、非常に現代と似た時代であつた。

その頃、英國の玉座には大きな顎をもつた王と餘り美しからぬ顔をした后（クイーン）がゐる。佛蘭西の玉座には同じく大きな顎をもつた王と美しい后（マリー）がゐた。何方の國に於いても、この世の利福を國家の名によつて壟斷してゐる貴族達には、水晶よりも明らかに、天下の大勢が永久に安定してゐると思はれてゐた。

これは、基督紀元千七百七十五年のことである。この恵まれた時代には、現代と同様、英國に對していろ／＼な心靈的な啓示が下された。ミセス・サウスコット（當時の宗教狂でヨハネが述べてゐる女は自分で、基督再生のときは自分を母とすると言き、數萬の愚夫愚婦に信仰された）は、その第二十五回の祝福すべき誕生日を迎へたばかりであつたが、すでに、近衛隊の豫言者めく一兵卒が、倫敦とウェストミンスターを併せ呑むやうな用意が整つてゐるなど、觸れ歩いて、彼女の莊嚴な出現を先觸れしてゐた。コック・レーンの幽靈（コック・レーンの冥家に幽霊が出たといふので大騒ぎしたが、それは或る女中の惡戯でこつそりそこに隠れてこき／＼やつたこみがわかつた）でさへ、そのお告げをこつ／＼と叩きたたてた後でやつとり鎮められてからまる十二年たつたばかりである。その様子は、丁度去年の精靈が（獨創味は不思議に缺けてゐたが）

そのお告げをしきりに叩きたてたやうであつたといふ。更に純然たる俗世界の出来事ではあるが、近ごろ亞米利加に植民してゐる英國民の會議から本國に宛て、何か通知が來た。（代表權なき課税）ところが、不思議なことには、この方がコック・レーン（コックには雄鵒の義がある）で解つたひよつこ連中のどれから受け取つたどんなお告げよりも、人類にとつてずつと重要なものだといふことが分つて來た。（亞米利加獨立戰爭の原因となつたので）

概して心靈的な事柄では、柄と三叉槍をもつたその姉妹（英國の事とその定紋の守護神は柄と三叉をもつてゐる）ほどに恵まれてゐなかつた佛蘭西は、紙幣をつくつて（佛蘭西當局が財政窘迫のため紙幣を濫發したこゝ）それを消費しつ

つ、國運の下り坂を威勢よく滑つてゐた。そのほか、佛蘭西は、基督教の僧侶達の指導の下に、さまざまな慈悲深い

（語反）ことをして愉快がつてゐた、たとへば、一人の少年が、眼の前五六十ヤードばかり離れたところを通つた汚ない僧侶の行列に向つて雨中に跪ひざまづいて敬禮しなかつたといふ康で、彼の手を斬りとり、舌を釘抜きでもぎとり、生身の彼を焼くやうに宣告したなどがそれである。すでにこの受難者が死刑にされたときに、『運命』といふ樵夫が見つけて置いた佛蘭西や諾威の森に生えてゐた樹が成長して、他日伐られ、板に挽かれて、あの史上に恐ろしい首袋と白刃をもつた機械の一種（斷頭）となつたのだといふことは、いかにもありさうなことではないか。又その日、巴里近くの搜せ

た土地を耕してゐた或る百姓が雨風にあてまいとして、その粗末な物置小屋に引き入れて置いた粗造の荷車——田圃の泥にまみれ、豚にかき廻され、雞の宿にされてゐた荷車を、『死』といふ農夫がすでに革命の時の死刑囚護送車にする爲めにとつて置いたのだといふことも、いかにもありさうなことではないか。だが、この樵夫と農夫とは、絶えず働いてはゐるけれども、少しも音を立てない。彼等が足音をぬすんで歩きまはつてゐるので、誰一人これを聞きつけるものはない。だから、尙更、『運命』や『死』といふものが、ほんとに働いてゐるのではないだらうか、など、疑ひを抱くやうな者は、無神論者とか國賊とか言はれなければならぬのであつた。

英國は英國で、自ら國家的な誇りにしてゐるほどの秩序の維持も人民の保護も、實際には殆んど行はれてゐなかつた。武装した大膽不敵な強盜や、追剥騒ぎが、倫敦に於いてさへ毎夜のやうに起つた。市民達は、その家財を家具屋の倉庫に託して安全にしてからでない、市外に出てはならぬ旨を公然と注意されてゐた。夜間の追剥は晝間の商人であつた、或る男はかつて『キャプテン』（當時の有名な追剥強盜の姓名）の姿でその仲間の商人に止まれと命じたところ、正體を見顯はされて挑戦されたので、勇敢にも相手の頭を射ちぬいて、馬で逃げてしまつた。又、郵便馬車が七人の盜賊の待伏を

くつたことがあつた。車掌は三人だけ射殺したが、『彈藥が種切れになつた爲めに』残つた四人に自分も射殺され、その後で、馬車は易々と掠奪された。あの素晴らしい勢力家である倫敦市長でさへ、タアナム・グリーンで一人の追刺に會つて、掠奪されたこともあつた。追刺は、この有名な人物の家來多勢の見てゐる前で、彼の持物をすつぱりと奪つてしまつたのだつた。倫敦監獄の囚人達が牢番達と亂闘を始めたので、尊嚴なる國法によつて、銃丸をいっぱい填めた喇叭銃(銃身より銃口の)を彼等に向つて發射したやうなこともあつた。盜賊が王宮の謁見式で貴人達の頸からダイヤモンドの十字架を切りとつたり、歩銃隊が密輸入品を搜索するとしてセント・ジャイルズに進入したり、暴徒が歩銃隊に發砲したり、歩銃隊が暴徒に發砲したり、こんないろ／＼の出來事が起つたが、誰一人として甚しく珍らしいことだとは考へなかつたのである。かゝる出來事に取巻かれてゐるので、刑吏は(いつも忙しかつた、これは用事が無いと言ふことよりも悪いのだが)絶えず用があつた、或はいろいろな罪人を長く珠數(じゆず)つなぎにしてみたり、或は火曜日に捉まつた押込み強盜を土曜日に絞罪(しほざい)に處してみたり、或はニューゲートの監獄で十二人づゝ一束(ひとつか)にして手に烙印(やういん)を押してみたり、或はウェストミンスター・ホール(こゝで國事記が書かれた)の戶外で、押收した小冊子を焼き棄てゝみたり、今日は、兇

惡な人殺しの生命(いのち)をとるかと思ふと、明日は百姓の子供から、六ペンスを盗んだ情(なさけ)ない小泥棒の生命(いのち)をとるといふ風であつた。

かういふすべての事柄、またこれに類した千百の事柄が、この懐(なつか)しい千七百七十五年の昔、及びその前後に起つてゐた。あの『樵夫』と『農夫』が人目につかずに働いてゐる一方、かういふ出來事に取り巻かれつゝ、この大きな額(あき)をもつた二人と美しからぬ顔と美しい顔をした他の二人は、實に騒々しく歩きまはつては、權柄(ごんぺい)づくで、その神權(しんごん) (帝王の權利)を振りまはしてゐた。かくて、千七百七十五年は、かういふお歴々の方々や、幾百萬の取るに足らぬ有象無象に——この物語の中の有象無象もその中に加へて——それぞれの前に横たはる道をたどらせつゝあつた。

二、郵便馬車

十一月も遅い或る金曜日の夜のこと、この物語に於て拔ふ最初の一人物の前にはドーヴァ街道が横たはつてゐた。がた／＼とシュタース・ヒル(倫敦の東有八哩の丘)を上つて行くドーヴァ通ひの郵便馬車の彼方にも同じくドーヴァ街道が横たはつてゐた。彼は他の旅客と同じく、馬車の傍の泥沼のやうな道を上つて行つた、それは何も、かゝる場合に、彼等が徒歩で上つて行きたいといふやうな嗜好(このみ)を持つ

てゐた譯ではなくて、上り道、馬具、泥濘、馬車と、すべての條件がひどく悪い爲めに、馬が、もう三度も動かなくなつた位で、殊に一度などは反抗的にブラック・ヒイズ(倫敦より三哩ある共有地)まで引返さうとして、道の真中で馬車を引つ張りまはしたからである。だがその時、手綱と鞭と駈者と車掌が一緒になつて、軍律を讀んで聞かせて(そんな反抗をすればせざるぞ引いた打つたりするぞ)馬の目的を差止めてしまつた——そんなことをしなかつたら、『或る動物は理性を具へてゐる』といふ議論にとつては都合がよかつたであらうが——それで馬の方は降参してまた動き出した。

頭を下げて、おど／＼と尾をふつて、馬は深い泥濘をば、いや／＼と潰すやうに進んで行く、時々はまるで肩や腰の關節からばら／＼になつて終ひはしないかと思はれる程にひどく躓ついたり泥濘に陥つて足掻いたりする。駈者が油斷のない『ウオ、ホウー サウ、ホウ、シウー』といふ掛聲をして休ませたり、止まらせたりする度に、車に近い方の馬はいかにも強い馬らしく頭やその上のものを一緒に激しく揺つて、この丘は馬車などが上ることは出来ないと言つてゐるやうであつた。馬がかうして身ぶるひする度に、この旅客は、神經質な旅客がよくするやうに、はつと驚いて、狼狽するであつた。

どの谷にもどの谷にも湯氣のやうな霧がこめてゐて、丁

度、安息を求めながらも見出すことの出来ない惡靈のやうに、寄る邊のない淋しい様子で丘の上にさまよひ上るのであつた。じめ／＼した恐ろしく冷たい霧である、それが、まるで荒海の波のやうに、あり／＼と、繋がり合ひひろがり合ふ波紋を描きながら、のろ／＼と空中を上つて行く。全くひどい霧で、馬車のランプの光は漸く燃えつゞけて、附近數ヤードの道を照してゐるだけだつた。それに、車を引張つてゐる馬は、はげしい湯氣を立てゝゐた、この霧もすつかり馬が吹き出したのではないかと思はれる程であつた。

前の一人の他に、もう二人の旅客が馬車の傍についてこつ／＼と丘に上つて行く。三人が三人とも頬骨から耳の上まで外套でつゝんで大長靴を穿いてゐる。だから、この三人は、一寸見たくらゐでは、相手がどんな人かお互に分らない。めい／＼が着物を澤山着こんでゐるので、お互に肉眼を使つても心眼を使つても分る筈はない。その頃の旅客は非常に用心深く、一寸知り合つたぐらゐで打ち解けた話はしなかつた。といふのは、途中でどんな人間に會ふにしても、それが盗賊かその仲間であるかも知れなかつたからである。盗賊の仲間といへば、この頃は何處の宿にも酒場にも『キャブテン』の手下になる者がゐて、それがその亭主から關係りのつまらない小者にまで及んでゐるといふ